

# Virginia Woolf が描く女性たち

—Clarissa, Mrs. Ramsay そして Lucy—

島 岡 晃 子

## はじめに

Virginia Woolf が女性の視点から見た歴史として *The Years* (1937)、翌年女性の教育と経済的自立が戦争を防ぐと唱えた *Three Guineas* (1938) を発表していることから彼女が歴史及び社会問題や戦争に強く関心を抱いていたことがわかる。*The Years* は “Novel-Essay” の形式で *The Pagiters* として執筆されていたが、“fact” と “vision” のつながりがうまくいかず、最終的に現在の *The Years* の形で出版された。<sup>(1)</sup> Woolf はまた *Pointz Hall* (*Between the Acts* の執筆中の題名) を書き続けながら、幾度も “No audience. No echo (9 June 1940)” (293). と日記に記している。当時のイギリスの状況は彼女が “We pour to the edge of a precipice . . . ? (24 July 1940)” (299) と書かざるを得ないほど追い詰められていた。Woolf はロンドンの危機的状況を日記に次のように綴っている。“The pressure of this battle wipes out London pretty quick. (9 June 1940)” (292). 30年代後半以降 Woolf の関心は欧州を震撼させるファシズムと戦争そして小説家としての自分自身についてあったように思う。また Woolf の作品における象徴の多用について Malcolm Cowley が “Mrs Woolf uses almost as many symbols as Yeats does in his later work” (176). と述べ、Harvena Richter が “All of Virginia Woolf’s novels abound in instances of symbolic action, but nowhere is it as concentrated as in her final novel” (62). と指摘しているが、次の Woolf の日記は彼女の文体を端的に表している。

That was by the way the best criticism I've had for a long time: that I poetise my inanimate scenes, stress my personality; dont (sic) let the meaning emerge from the matière [. . .]. (18 January 1939)

Woolf の文体が象徴を多用し “poetic” であり、彼女は独特の世界を築いている点では、*Between the Acts* は Woolf らしさが最も表れた作品の一つだと思う。またタイトル *Between the Acts* における解釈を James Naremore は以下のように述べている。“These, then, are two important implications of the title: we are between wars and between two decisive acts in the lives of archetypal male and female [. . .]” (234). さらに彼は *Between the Acts* 及び他の作品に関して “*Between the Acts* is built on that attempt at a masculine-feminine dialectic which is so much a part of Mrs. Woolf's fiction” (233). とも論じている。これらの Naremore の解釈から Woolf の小説が男女の関わりを問題にしていることが示され、*A Room of One's Own* や *Three Guineas* などに見られる「女性の生活」や「女性の歴史」に対する Woolf の関心と彼女の小説との接点もうかがえる。また *Mrs. Dalloway* の Peter や *To the Lighthouse* の Augustus Carmichael など Woolf の描く男性を一概に定義することは困難だが、*To the Lighthouse* の Mr. Ramsay や Charles Tansley そして *Between the Acts* の Mr. Oliver (以後 Bart) などを考察した結果 Roger Poole は端的に Woolf の小説のテーマを “Men divide. Women harmonies. This is the theme of much of her writing” (260). と明言している。そのような批評家たちの意見を念頭に置きここでは *Between the Acts* の Bart と Mrs. Swithin (以後 Lucy) に焦点をあて、*Mrs. Dalloway* の Clarissa そして *To the Lighthouse* の Mrs. Ramsay を視野にいれ、Lucy の十字架の意味を考察していく。

## I 19世紀世代

Woolf が *To the Lighthouse* で Ramsay 夫妻の次世代として婚約した Paul と Minta を描いたように、*Between the Acts* でも “nineteenth-century couple”<sup>(2)</sup> として Bart と Lucy を描き、次世代の息子夫婦を Giles と Isa として登場させている。Bart と Lucy の役割はこの小説に時間の流れや人々の繋がりを感じさせ、そこに生活観をもたせる役割を担っている。Bart と Lucy がしばしば母親を思い出すことから、彼らがただそこに存在しているのではなく母親との関係性もそこに残していることが読み取れる。また彼らの回想は彼らの時間が現在だけでなく過去から続くその流れの中にあることを明らかにしている。次世代の Giles と Isa の小説における役割は Bart と Lucy よりも具体的であるが、人との繋がりという点は希薄であるように感じられる。Giles の役割のひとつはイギリスに今にも迫ろうとする戦争の足音を読者にだけ知らせることであろう。*Between the Acts* で戦争に言及または暗示しているのは、Giles と Bart の読む新聞が主であり、pageant を開こうとする村は穏やかでいつもと変わりなく “swallow”<sup>(3)</sup> が飛び交っている。そして家庭的であることを嫌う Isa は Giles を “The father of my children” としての愛情しか感じていない。日常をロンドンで送り週末だけ家族と共に過ごす Giles も Isa と同様妻子に対して心からの愛情は持てないでいる。Giles と Isa の存在は家族や夫婦における既存の価値観を捨て新しい価値観を築こうとする次世代の苦しみが見てとれる。

また *Between the Acts* では Bart と Lucy が次のような口論する場面がある。

‘It’s very unsettled. It’ll rain, I’m afraid. We can only pray,’ she added, and fingered her crucifix.

‘And provide umbrellas,’ said her brother. (17)

*Between the Acts* の二人は夫婦として描かれていないが、この場面は *To the Lighthouse* の Ramsay 夫妻の灯台行の日の天気についての口論を思い出させる。Poole は Ramsay 夫妻を彷彿とさせる Bart と Lucy を重要だとして次のように述べている。

The relationship between old Bartholomew Oliver and his sister Lucy Swithin is central to the novel, because the disagreement between Bart and Lucy is not one which,..is capable of mutation, progress and resolution. (233)

Bart と Lucy が *Between the Acts* の中心的人物であり、両者の思考の相違は話しあい和解できるものではない。Bart と Lucy の重要性は *To the Lighthouse* の Ramsay 夫妻の口論が男女の視点の違いを鮮明に描き出していたように、Bart と Lucy の思考の相違も男女の性差からくるものだとしているところにある。<sup>(4)</sup> なぜなら Woolf は Bart と Lucy の関係を “brother and sister, flesh and blood was not a barrier, but a mist. [...] What she saw he didn’t; what he saw she didn’t [...]” (18). と述べているからである。兄と妹とは完全に交わることがないというのではなく相手の考えを見えなくするものだ。そのため Lucy が見たものを Bart は見えない、つまり男性が当たり前だと思うことが女性にはわからないと Lucy と Bart の相違を性差で描いている。また Woolf がその人物の思考の違いを性差として描いているのは、Ramsay 夫妻や Bart と Lucy といった19世紀の世代であり、Ramsay 夫妻が “the symbols of marriage, husband and wife” (80) と明確に表現されているのに対して *Between the Acts* の次世代である Giles と Isa の思考は性差ではとらえられない。

また Poole は Woolf の小説を通して “the male mind” と “the female

mind” の系譜を明らかにしている。

The line, from the early intellectuals in *Voyage Out* and *Night and Day* [. . .] through Ramsay and Tansley of *To the Lighthouse*, to Bart of *Between the Acts*, is unbroken. It is the line of the male mind at its rationalist best [. . .].

And the female mind at its best has been given equally long, thorough and patient treatment in the ‘magical’ ladies from Helen in *Voyage Out* [. . .] through Mrs Ramsay and Lily in *To the Lighthouse*, to Lucy Swithin in the *Between the Acts*. (261)

Poole がここで用いる “rational” とは Mr. Ramsay に最もよくあてはまるのだが、人を思いやる感情で行動するのではなく、論理的な正しさや事実を追及する性質のことである。また Poole が Woolf が描く女性たちを “rational” に対して “magical” と定義しているのは社会、文明、歴史を論理的または合理的にとらえる男性性に対して合理的、論理的でなくまた理屈では説明のつかない目に見えないもの、人の力を越えた存在を認める性質を女性性としたからではないだろうか。Woolf が goddess を象徴として作品に多用しているのも、女性の “magical” な性質を表現するためであろう。Ramsay 夫妻や Bart と Lucy のように Woolf が男女の性差がその人物の思考を決定づけるように描いたのは19世紀という時代が生み出した人物であるからだ。そして Woolf の描く男女がそのような特徴をもつのは、女性のもつ “magical” な部分を “rational” と対比することでその女性の personality が鮮明に描き出されるからである。Poole の系譜は Woolf の作品をかなり明確にとらえているが、*Mrs. Dalloway* の Clarissa も Mrs. Ramsay や Lucy に劣らない思想をもつ人物として描かれていることから “magical ladies” に Clarissa を加えるべきであると思う。

## II Clarissa と Mrs. Ramsay の思想

先で Mrs. Ramsay や Lucy だけでなく Clarissa も理屈では説明がつかない目に見えないものを認める “magical” な性質を持つと述べてきたが、Clarissa 自身は次のように自問している。

[...]did it not become consoling to believe [...] that somehow in the streets of London, on the ebb and flow of things, here, there, she survived, Peter survived, lived in each other, she being part, she was positive, of the trees at home; of the house there, ugly, rambling all to bits and pieces as it was; part of people she had never met; being laid out like a mist between the people she knew best, who lifted her on their branches as she had seen the trees lift the mist, but it spread ever so far, her life, herself. (9-10)

Clarissa は自分が家の木の一部であり、自分自身が遠くまで広がっていると思えるため、Peter も自分も日々の生活の営みやロンドンの通りに生き続け、お互いの心の中に生きると信じることは慰めにならないのかと考えている。Clarissa が自分の死後もこの世のあちらこちらに生き続けると信じているのは、彼女の自身の心の中にも亡くなった妹や何年も会っていない友人が生き続けているからである。また Peter の視点から Clarissa の思想を “Transcendental theory” として次のように説明している。

She was all that [...]. It ended in a transcendental theory which, with her horror of death, allowed her to believe, or say that she believed (for all her scepticism), that since our apparitions, the part of us which

appears, are so momentary compared with the other, the unseen part of us, which spreads wide, the unseen might survive, be recovered somehow attached to this person or that, or even haunting certain places, after death. Perhaps—perhaps.

Looking back over that long friendship of almost thirty years her theory worked to this extent. (167-168)

Peter の視点から語られる Clarissa の “Transcendental theory” とは人がその人の肉体部分だけで成り立つものでなく、その人は目に見えない所まで広がり、死後も生き続け、人はそのもの全てになるというものであり、ほぼ Clarissa の思いを言い当てているが、Peter は Clarissa がそのような思想を持つ理由を “with her horror of death” としているのは Clarissa の思いと Peter の視点から見た Clarissa との間のずれを明確にするためであろう。また Mrs. Ramsay はディナー・パーティーの後、木々の静寂と絶え間なく変化し続ける自らの思いを対比し、人と人が共に過ごすということについてこのような思いに至った。

[...] she felt [...] that community of feeling with other people which emotion gives as if the walls of partition had become so thin that practically (the feeling was one of relief and happiness) it was all one stream, and chairs, tables, maps, were hers, were theirs, it did not matter whose, and Paul and Minta would carry it on when she was dead. (123)

Mrs. Ramsay は人が人と共に過ごすことで人々が思いを一つにし、それが物であれば人と人が共有していく。そしてそれは次の世代に受け継がれると考えるようになった。Woolf は Clarissa と Mrs. Ramsay に自らの死後も予測できる程度の思想を持たせ、その personality によって読者を魅

了してきた。そしてそのような人物を通して確かに Woolf はこれまでクリスチャン信仰に対して懐疑的な立場を取り続けてきた。例えば *Mrs. Dalloway* では敬虔なクリスチャンである Kilman を Clarissa の視点から痛烈に批判している。“The whole house this morning smelt of tar. Still, better poor Grizzle than Miss Kilman; better distemper and tar and all the rest of it than sitting mewed in a stuffy bedroom with a prayer book!” (12) “Did religion solve that[the supreme mystery], or love?” (140) Clarissa は Miss Kilman なら Grizzle の方がずっといいし、祈祷書をもってかびくさいベットにいるくらいなら伝染病やタールやそのほかどんなものでも許せると言い切る。また *To the Lighthouse* では Mrs. Ramsay 自身が自らの心の声をも否定し、Mrs. Ramsay の小説全体を覆うほどの personality がその信仰からくるものではないことを示した。

It will come, it will come, when suddedly she added, We are in the hands of the Lords.

But instantly she was annoyed with herself for saying that [ . . . ].

What brought her to say that: ‘We are in the hands of the Lord’? she wondered. The insincerity slipping in among the truths roused her, annoyed her. [ . . . ] How could any Lord have made this.world? she asked. With her mind she had always seized the fact that there is no reason, order, justice: but suffering, death, the poor. There was no treachery too base for the world to commit; she knew that. No happiness lasted; she knew that. (70-71)

このように Clarissa と Mrs. Ramsay に共通する思想は世の中はクリスチャンの信仰だけでは解決できないというものであり、それに加えて Mrs. Ramsay は生きることの厳しさと残酷さを強調している。



### III Lucy の思想と十字架

では Lucy の思想はどうであろうか。Lucy を好意的にみる Isa は、Bart と口論した後でさえ子供達に陽気に手を振る Lucy を次のような驚嘆と尊敬の眼差しで見ている。

What an angel she was—the old woman!

Thus to salute the children; to beat up against those immensities and the old man's irreverences her skinny hands, her laughing eyes! How courageous to defy Bart and the weather! (16-17)

“love and hate” の感情にとらわれた Isa は、自らの信仰をも Bart に端から否定され、十字架を握り締め少しおびえたかと思うとすぐ立ち直る Lucy を “angel” そして “courageous” と言い表した。そこに Lucy の人並み外れた “magical” な性質が表されている。

また Lucy は何げなく “We live in others, Mr. . . . We live in things” (44). とつぶやいたり, “Did you feel [. . .] we act different parts but are the same?” (127) と pageant の主題を暗示させ、読者に Woolf が常に意識してきた “life” とは何であるかという疑問を投げかけたりと、Lucy のこの小説における役割は大きい。そして William と Isa の解釈より、Lucy の思想の大枠が以下のように述べられている。

‘The Victorians,’ Mrs. Swithin mused. ‘I don’t believe,’ she said with her odd little smile, ‘that there ever were such people. Only you and me and William dressed differently.’

‘You don’t believe in history,’ said William. [. . .]

Mrs. Swithin caressed her cross. [. . .] She was off, they guessed

[...]. Sheep, cows, grass, trees, ourselves—all are one. [...] the agony of the particular sheep, cow, or human being is necessary; [...] we reach the conclusion that *all* is harmony, could we hear it. [...] if the thought gave her comfort, William and Isa smiled across her, let her think it. (104)

Lucyは自分に関係のない人、物はないと考えている。なぜなら羊や牛や木々やわたしたち人間、すべてが一つだから。人はそれぞれ違う装いをしているだけでみんな同じである。動物も人間も苦しみ、悲しみは常に在るもので、もしその苦しみの声が聞ければ、その苦しみさえ分かち合える。WilliamとIsaはこのようなLucyの思想に関心を示すこともなく“[...] let her think it.”と冷静に受け止めている。Lucyの思想にはClarissaやMrs. Ramsayのようにその他の登場人物に影響を与える程の説得力がないという点で、Lucyは“magical”な素質はあるが信憑性にはかける。ではこのような思想を持つLucyに十字架がなぜ必要なのか。Lucyは十字架をいつも身につけ習慣的に十字架をにぎりしめている。

‘[...] It’ll rain, I’m afraid. We can only pray,’ she added, and fingered her crucifix.

‘And provide umbrellas,’ said her brother.

Lucy flushed. He struck her faith. When she said ‘pray,’ he added ‘umbrellas.’ She half covered the cross with her fingers. (17)

このような描写が何度も繰り返されるが、Lucy自身の言葉でその信仰について語ることはない。James Haflyは“Lucy Swithin, like Mrs Ramsay” (185)と述べているが、Lucyの思想はMrs. Ramsayほどほかの登場人物たちに影響を与えていない。またWilliamは“How could she weight herself down by that sleek symbol? How stamp herself, so volatile, so

vagrant, with that image?" (46) と疑問を抱くが、読者も同じように Lucy の十字架と彼女の思想の不一致に困惑させられる。Lucy と共に生活している Isa は Lucy の信仰を受け入れているが、William は Lucy の信仰に気づかない。それは Lucy が象徴的に十字架を身につけ、何度も握ったり、なでたりするだけでその信仰についてほとんど何も語らないからである。Lucy を好意的にとらえている William でさえ Lucy と十字架を結び付ける点を見つけられず、Isa もまた Lucy の信仰を深く解釈していない。意外にも Lucy の信仰を比較的明確にとらえているのは彼女の信仰をあざ笑い、攻撃する Bart である。

He looked sardonically at Lucy [...].

She was thinking, he supposed, God is peace.

God is love. For she belonged to the unifiers;  
he to the separatists. (72)

しかしこの Bart の解釈も部分的で Lucy の信仰の全体を示していない。これまでも Lucy の十字架については批評され、James Hafly は Lucy の十字架を次のようにとらえている。

Mrs Swithin's crucifix, worn on a chain about her neck, is significant. *Between the Acts* is the only one of Virginia Woolf's novels in which a sympathetic character is Christian, and in which Christianity itself is treated with anything like sympathy. Mrs Swithin is extremely religious; to be sure, religion is mainly a symbol of the spiritual life [...]. (186)

Hafly は *Mrs. Dalloway* の Kilman などを視野にいれ、Lucy を Woolf が描いた唯一の好意的なクリスチャンとしてとらえ、信仰が精神を重んじる生

活の象徴として描いていると指摘した。しかしそれとは対照的に Naremore は Lucy の信仰に対する Bart の視点が Woolf の立場であるとしている。

[. . .]Virginia Woolf herself made a habit of attacking the official Christianity of the Victorians, and Bartholomew Oliver is by no means an unsympathetic character when he snorts at Mrs. Swithin's crucifix. (239)

また Roger Poole は、Lucy の信仰が Woolf の信仰に対する立場を示していると次のように論じている。

Bart's attitude to his sister is one of pure rationalism. He destroys her illusions, he attacks her faith (she is depicted as a Christian, hanging on desperately to the crucifix among her neck as her last refuge), belittles her remark [. . .].

Virginia has encoded her own dilemma in the symbol of the Christian faith, God, a 'prayable being' [. . .]. Christianity, God, a 'prayable being' must surely correspond to a spiritual value which would transcend the world of rationalist certainty. (233-235)

登場人物のなかでも Lucy の信仰を肯定している Isa, その反対に否定し攻撃する Bart がいる。また Woolf は Lucy を思想と行動の両面でクリスチャンとして描いていれば、これまでクリスチャンに懐疑的であった Woolf の立場の変化としてとらえることができるのだが、小説の主題に重なるのは Lucy の思想である“all is one”である。そのように考えると Lucy の十字架にはクリスチャン信仰とは別の意味が込められていることがわかる。Poole が述べているように、“rationalist”を越える“spiritual”

な存在として Lucy の信仰が必要であったのかもしれないが、それなら十字架の必要性はないだろう。Lucy の十字架の意味は Isa の読む新聞に書かれた女性のレイプ事件と大きく関わりがある。このレイプについて Patricia Laurence は次のように論じている。

The domestic rape reported in the newspaper serves as counterpoint to the political rape of lands by Hitler; the “scream” of the girl becomes another “chime” and part of the “art” of Miss La Trobe’s play. (241)

このレイプについて小説では3度ふれているが、最初は Isa の視点を通じて初めてこのレイプを知ったときの彼女の驚きと動揺であり、その時その女性を救うかのように、象徴的に Lucy が ‘hammer’ を持って入ってくる。そして2度目は “The same chime followed the same chime, only this year beneath the chime she heard: ‘The girl screamed and hit him about the face with a hammer’” (16). である。ここではこのレイプの非日常性、そして戦争によって ‘ordinary life’ が壊されていくことを示し、3度目は読者に疑問を投げかける形で終わっている。“[...] She had hit him [...] What then?” (128) このように読むとき Lucy の十字架に聖母マリアの処女性が象徴されているとは考えられないだろうか。Woolf がこのレイプを男性支配による女性に対する象徴的な事件として小説に取り入れたとすれば、Lucy の十字架は “rationalist” に代表される男性たちへのわずかな抵抗であり、女性の身体と精神における自主独立の碑ではないだろうか。

## お わ り に

Woolf の作品における “mannerisms” については F. R. Leavis そして Naremore が指摘している。しかしここで論じてきた I 19世紀世代や

II Clarissa と Mrs. Ramsay の思想 も彼女の作品で繰り返し用いられる素材ではあるが、その素材の意味や扱いは作品ごとに違う。まず始めに19世紀世代として *To the Lighthouse* の Ramsay 夫妻と兄妹の Bart と Lucy をとりあげた。双方の共通点は Mr. Ramsay と Ramsay, Bart と Lucy の思考の違いが男女の性差によるもので、特に Woolf は19世紀世代の思考の違いを性差として表現したのではないか。しかし Ramsay 夫妻も Bart と Lucy も考え方の相違がその人間関係の終わりを意味しない。Mr. Ramsay は Mrs. Ramsay を死んでもなお愛し続け、Bart と Lucy は “Nothing changed their affection; no argument; no fact; no truth” (18). と述べられている。次に *Mrs. Dalloway* の Clarissa と *To the Lighthouse* の Mrs. Ramsay の思想である。Clarissa と Ramsay 夫人は死後も予測可能な思想があり、それは彼女たちのクリスチャンや “God” への不信から生まれたのであろう。そして Clarissa や Mrs. Ramsay の思想の背後に Woolf のクリスチャン信仰への懐疑が見られる。最後に Lucy の思想と十字架についてであるが、Lucy は *Outline of History* に親しみ言葉少なく簡潔に “all is one” を基調とした思想を述べる。しかし登場人物である William の視点から述べられているように、Lucy の十字架と彼女のクリスチャン信仰は結びつかない。彼女の十字架は Isa が読む新聞に書かれたレイブ事件を背景として読むとき、聖母マリアの処女性を意味しているのではないだろうか。Woolf が男性支配による女性の立場の象徴的な事実として小説に取り入れたとすれば、そのような女性の身体的、精神的な自立の象徴として Lucy の十字架をとらえることができる。*Between the Acts* は Woolf が *Three Guineas* や *The Years* で問題にした女性の生活と自立を含んだ “poetic” な作品である。もし彼女が次の作品を書けば、Woolf の問題意識と彼女独特の文体による新境地にたどり着いたかもしれない。

#### 註

テキストは Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway* (Penguin, 1992), *To the Lighthouse* (Penguin, 1992), *The Years* (Penguin, 1998), *Between the Acts* (Penguin, 1992) を

使用した。

- (1) *The Pagiters* (後の *The Years*) 執筆に際して、Woolf は “fact” を歴史的事実における分析とし、“vision” を語りの部分としてこの二つを自然につなげようと苦心した。
- (2) Naremore は *The World Without a self* (1973) において *Between the Acts* の世代をそれぞれ第一世代として “the eighteenth-century portraits”, 第二世代として “nineteenth-century couple”, 第三世代として “the twentieth-century figures” として論じている。
- (3) “swallow” は幸せのシンボルであるだけでなく、*Macbeth* (Act I Scene VI) のダンカンとバンクォーがマクベス城の爽やかで心地よい様子を述べる場面を連想させる。*Between the Acts* が第二次大戦直前のイギリスの村を舞台としていること、そして *Macbeth* のこの場面も王暗殺まで残り数時間であるといった類似点がある。このような清々しく、和やか情景描写とその後の緊迫した状況の対比が後に起こる出来事を悲劇として強く印象づける。
- (4) *To the Lighthouse* に関して、島岡 晃子 (2004) 「女性史としての *The Years*」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第7号, 82.
- (5) 島岡 晃子 (2003) 「Virginia Woolf の *Mrs. Dalloway* における神話的女性像—Peter の見る女神—」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第6号, 19-32.  
また *Between the Acts* においても Lucy を “majestic goddess” (45) と表現している。

#### 引用文献

- Cowley, Malcolm. “England Under Glass.” McNeese, ed. *Virginia Woolf Critical Assessments*. 1994.
- Hafley, James. “A Reading of *Between the Acts*.” McNeese, ed. *Virginia Woolf Critical Assessments*. 1994.
- Laurence, Patricia. “The Facts and Fugue of War—From *Three Guineas* to *Between the Acts*.” Hussey, ed. *Virginia Woolf and War*. Syracuse University Press, 1991.
- Naremore, James. *The World Without a Self*. Yale University, 1973.
- Poole, Roger. *The Unknown Virginia Woolf*. Humanities Press, 1990.
- Richter, Harvena. *Virginia Woolf: The Inward Voyage*. Princeton University Press, 1970.